

い所に眞の大滋味があるのてす、例へば水を飲んで甘い、と云ふてもどんな味か、と問はれば説明はできぬ、矢張り米は米の味、水は水の味、ひてあるとよ外はいはれぬ、其の處に妙味か存するのである、私の知人に一升餅をも食盡すと云ふ、大變餅の好きな人がある、其人は一升の餅を食べるにも何にも外の物を附けない、砂糖とか、アンとか、キナコとかいふ餅に附ける物か傍に在てもそれを附けぬ、若し外の物を附げたり何にかすると、大事な餅の味か消えると云ふてをる、それじや餅の味はどんなかと云ふと、餅は矢張り餅の味かすると云ふて居る味か在て無い、無くてある、ツマリ有るとも無いとも、説明し盡すことか出来ぬ、ソコか眞の妙味てす、それが没滋味、若くは没可把とも云ひます、可把とは把るべき無しと云ふので、摘み所の無いことてす、上に申した趙州の無の字公案の如き、是れです、これに向つて如何々々と工夫を下します、サア其の無を捕へて見よ、無を働らかしてみよ、無を喰べて見よ、無の中にはどんな味かある、無の中にはどんな響かあるか、どんな物は總て無い、彼れ此れのし名を

附けたなら無ではない、名の附かぬ名か有らう、道理の判断を超へた道理かあるだらう、其道理をひとつ研究してみよ、無理な話のやうだかソレか眞理の所在じや、又臨濟門下にては能く雙手の聲を聞けといふことを申す、是れ亦た一の公案てす、兩手の聲は誰でも聞くか、雙手の聲を聞けなぞと云ふと、丸で謎の様に思はるゝが、決してそうてはない、片手の聲を聞く耳かなければ、禪味は解せられぬ、禪宗の問答には妙な語か古より澤山あります、尾張の黄泉和尚と云ふは近代に於ける名高い禪宗の大知識であつた、所か或禪僧が尾張の黄泉と云へば、天下に名高い高德であるが、どの位な力量かあるか、一つ、參得して見やうといふ見識で、黄泉和尚の所へ行きて問答を始めた、「久しく黄泉と聞く未審し、麥香煎か米香煎か」と問ふた、黄泉の名は聞て居るか、麥か米か、凡夫か佛か、高く止つて居るか、低く構へて居るか、絶對か待對か、世間的であるか、出世間的であるか、斯ふ云ふ問ひである、すると黄泉和尚は、「試みに喫却して看よ」と答へられた、サア試に食へてみよ、人に聞ては解らんぞ、麥の味か米の味か自

ら喫却してみよ自ら食べて見た佛法で無ければ役に立たぬ粉に書いた餅は空腹の者には半文の價も無い、聞くより食べて見よ、スルト其禪僧も仲々シツかりして居る、忽ち「喝」と一喝を下した、試みに食べて見よと、曰はれたが、食べの喰べないのといふやうては二見に落ちて居る、そんな議論に涉る、佛法は何にもならぬ、喰べなけりや解からぬなど曰はれるはトボケてござる、佛法は食べ物とは違ふ、眞實禪門の活眼を開いて居るならば食べない中に其味を知り、聞かない中に其聲を悟つてゆかねばならぬ、それに喰べて見よなんと云ふ此和尚頗る悉碌して居りはせぬかと云ふので大喝一聲ドナリ付けた大變な見幕です、併し惜い哉未だ悟り嗅い、味噌の味噌嗅きは上味噌で無い、黄泉和尚はニッコリ笑て「ヲ、むせたなむせたな」と曰はれた、實に學問をすると學問に咽せる、高き位地に上ると位地に咽せる、悟を開くと悟に咽せる、公案を工夫すれば工夫に咽せる、昔し乞食桃水和尚が、大津の町で草鞋造りをして居られた時、和尚に歸依厚き立派な僧侶か錦の袈裟を掛け輿に乗りて通りかゝり和尚を

見て相見した時、桃水和尚其人の手を把て、貴様は諸侯に可愛かられて居るやうじや、多數の僧侶は皆大名酒に酔つて其本心を失なひ、徒らに名利の奴隷となるか多い、吾れはマウ再び此世に於て貴様の顔を見る事はできませんかも知れぬから、今逢ふたを幸に遺言をして置く、どんなに出世をしても、必ず大名酒に酔ふなよと云はれたといふ話がある、實に貴とき教訓です、立派な名僧になりました、吾は諸侯の信用を得て出世することの出来たのは一身の榮譽であるなぞと云ふは既に皆大名酒に泥酔したので、所謂諸侯に咽せてしまふたのです、金錢を貯へると金錢に咽せる、名譽で得れば名譽に咽せる、慈善を行ふ人は慈善に咽せる、凡夫の生涯は見る物、聞く物に咽せ、作すこと爲ることに酔ふて居るのである、此禪座の正當時眞實非思量の境界に達したならば如何なる事物に接するとも寸毫の束縛を受けず、一步も動着もしない、所謂捕まへ所の無い、又味ひの無い公案に對する工夫の効果か現はれて自然に本性の智徳か現前して來るからであります。

彼の剣道と禪機とに於て名高かりし明治維新の功臣たる山岡鐵舟居士の取つて置きの話と云ふのかある夫れは駿河國の頸長の長四郎の話です此者は性來顎が長かつたから人之を呼んで顎長の長四郎と云つてをつた此者は元は泥棒であつた厄介な顎長かやつたものですそれが常に二三百人の子分をもつて駿遠參の三箇國に涉つて始終悪い事を働らいて暴れ廻つて居つた或時一人の禪僧が京都から江戸へ參らうと云ふので沼津の宿へ泊りました其の泊る日に途中の茶屋で長四郎と一緒に居た處が彼の僧は江戸表の役所の僧と見へ禪僧にも似合はず金がありそうに見えたソコで長四郎は私も江戸近くへ參る者でありますから旅は道連れとやらこれより御伴いたしませうなどと云ふてマウ〜同行の約束が出来て其晩は沼津で同宿する事になつた處が同宿して居て盗んでは露現をするの恐れがあるから態と其晩は他所へ出掛ることに決心し宿へつくと長四郎が明日は正七ツに戻つて來ますが是から一里計りある田舎へ要用があつて往きて參りますと云ふて旅店を

出た固より其道には巧みなる奴であるから時刻をはかり真々引き返へして宿屋の高塀を乗り越え庭の小蔭に身を潜めて夜の深けるのを待つて居た追々ど夜も更けて下や二階の様子を窺ふに最早や寂々寥々として誰も起きて居る者は無いやうなやうすマウしめたと思つて座敷の前に至りソツト障子を開けて中を窺ひ見るとギンヤリと行燈の火がとぼつて居る蒲團は敷て居るが和尚の姿は見へぬ和尚が居らんのみならず凡そ三四尺もあらうと思ふ程の栢の樹が一本蒲團の真中に突き立つて居る之を見た長四郎は非常に驚いた之はどうしたことであらうと恐る〜坐敷へ這入らうと思ふと今迄栢の木と思ふたのがハツト思ふ間に真々禪僧の姿に成つて端然として坐禪して居るさすがの長四郎もこれには恐れ入つた禪僧の前は大層早く歸つて來たがマウ用事は済んだのかハイ済みましたとは云ふたが餘りの不思議に却つて自分の方が恐くなつてそのまゝに臥床に就いた其の翌日に成つて長四郎は考へたどうも此の和尚は魔法使ひではあるまいか豪い奇術を覺えて居

る昔の大蛇丸は蛇に成つた、自來也は藁に成つたと云ふが、蛇や藁は動物だから人に殺されるの恐れがある。柏の木なら大丈夫である。泥棒でも柏の木に化ける秘傳を知つて居たらどんな所へ這入ても恐ろしくはない。是は面白い魔法だわい。幾十人に圍まれても庭の隅で柏木に化けてしまつたら是れ程大丈夫なことはない。泥棒としては第一等の遁身術である。よし一つ此和尙をダマして秘密の方術を授つてやらうと思ひ、翌日箱根の絶頂へ往き、和尙さん向ふの林の中で休んで行きませうと勸めて人なき處へ連れて行き、時に和尙さんお前さんは一體何に者か、私しは出家じや、虚言を云つて居なさる。出家があんな物に化けるなんぞと云ふ事があるものか、妨主の化けものなんと云ふは聞へた事が無い。お前さんは化者か、魔法使ひか、一體私を何んと思ふて居なさる。貴様は人間だ、人間は當り前であるが、私の商買は何んだと思ひなさる。貴様の商買は何にか知らんが、顎が長くて、目附がチットキョロづいて居るが、まさか泥棒じや有るまいなア。所が私は泥棒も泥棒、金看板の泥棒だ、今日迄は恐いと思

つた事は無いが、昨夕お前さん柏の木に化けたには私も驚いた併しお前さん旨い事を知て居るね、どうか幾等でもお金はあげるからあの化け方を教へて下さい。否なと云ふならお前さんの命を貰いますぞと、長四郎一生懸命に強硬談判を始めた。和尙は考へて大に悟る所があつたから、さう云はれちや仕方が無い打明けて云ふが、實は己れも泥棒なんだ。之を聞いた長四郎どうもさうだらうと思つた。さうすりや矢張お仲間じや、どうか是非私に教えて下さい。いや、教えてはやるがチット六ヶしいぞ、縦ひ六ヶしくつてもやりませう。それを覺えたらマウ私は石川五右衛門以上になれますから、どうぞ教へて貰ひたひ。それじや教へてやらうが、昨夜おれは禪宗の公案と云ふものを工夫したのだ。昔し趙州和尙と云へる名僧に或る僧が如何なるか、是れ祖師西來意と問ふた。すると趙州和尙は、庭前の柏樹子と答へた。これは昔し達磨大師が西の方の天竺から支那へ來られたが、其達磨大師の悟りとはどんなものかと問ふたのだ。然るに趙州は庭の前の柏の樹じやと答へた。昨夜自分は其庭前の柏樹子と云ふ

公案を、ウント工夫して居た、それで私は柏の樹に成つたのだ、貴様も庭前の柏樹子と云ふ公案に向つて坐禪をして工夫をすれば、必ず柏の樹に化けられる、工夫の仕方はこれ／＼であると教えられた、長四郎は煙にまかれて、これはどうも中々六ヶしいからできるか知らん、なんの六ヶしいとはいふものゝ昔しの自來也杯も皆なこう云ふ行をして、墓にも大蛇にもなる事を覺えたのである、若し之を工夫しても貴様が柏の樹に化ける事が出来たら、私しは何時でも首でも何でも渡してやる、其代り之が出来たら私の弟子に成んだぞ、私は大泥棒だから己れが子分にしてやる、(長)これは永くかゝりませうか、(僧)さうだ早く二年遅くて三年、さうして此の行は晝夜撓ますやらねばならぬぞ、どうもさう永くかゝつては困る、モット輕便な方法は有りますまいか、(僧)馬鹿を云へ手前は未だ二十だいらう、若いものが、二年や三年の修行は何んの事だ、(僧)拍の木になることを覺え大泥棒となつて天下に名を揚げやうと云ふ長四郎はドウやら決心した、そこで坐禪の方法を傳へて下さいと云ふので箱根の

絶頂に於て工夫の仕方を教へて貰いそれからと云ふものは、足の痛いのを我慢して庭前の柏樹子を一生懸命に工夫して居た、其中に悟りは容易に開ける筈もないが、心は段々と平穩になつて来た、心が落ち着いてくると同時に天性に具有せる良心の光りが現はれて来た、悟りの方は一向五里霧中に彷徨する有様じやが、精神が靜まるに従つて、噫今の吾か身は恥かしことである、今迄の量見は實に悪るかつた妄りに他人の金錢を貪り、人に迷惑を掛け、人を苦しめて以て自ら一時の快樂を貪ぼるとは何たる惡業ぞや、ア、誠に濟まん事であつたと云ふ懺悔心が忽然として現はれて来た、それから自分が益々濟まないく／＼と徹底悔悟し、しかも自分から其心が起つたのであるから、遂には數百人の子分供を集めて、貴様達も今までの惡事を止めて是れから正業に就て呉れよと云ふて、有金其他の財産は悉皆子分の者共に配布して遣り、自分はマウ殆ど無一物となり、以前の罪滅しと云ふ心で今度は俠客と成り、人を助け、人を濟ひ、自分の身は生れ代つた様な好人物になつて、世間からは義人として

尊敬せらるるやうになつた。此處に於て江戸に至りて自分の師たる彼の和尚
さんを尋ねたら芝の金地院と云ふ臨濟宗の御寺に居る和尚であつた。それか
ら真々に其弟子と成り、俗人の姿では有るが、國元に於て生涯坐禪を修し、しま
いには餘程禪定力も進み、六十餘歳で立派な往生を遂げた。其長四郎が死に際
に至り子分の者共が來りて毎日〱看護をして居つたが、マウ息を引きとら
うと云ふ時に、一同の者に告げて云ふには、人は死に際のお念佛を申すと、佛の
お導きを頂くとやら、人は死に際の信心と誓願とが大事だと云ふが、私は今日
迄此の娑婆にマダ多くの罪の借金がある、大勢の人を苦しめた罪業の借金は
その利息も高いさうな、一粒萬倍の罪の利息を拂ふのは中々容易で無い若し
や地獄へでも生れた時は借金なしが出来ない、最後の念願として、私はマウ一
度此世へ生れて來て佛様の行持を修行しやうと思ふがお前途も精々善行を
修めて今迄の罪滅しをするもよい、自分は再び此頸長で生れ替つて來たいか
ら、御念佛の代にどうか領長の長四郎と唱ひてくれ、一同も變だと思つたが當

人の頼みであるから、一同が聲を揃へて頸長の長四郎〱〱と唱ひた。長四
郎自身も之を唱ひつゝ、歎喜の顔にて手を合せ笑を含み眠るが如くで往生を
遂げたさうであります。之を山岡鐵舟居士が御得意の話として屢ば聞かされ
た事があります。今日の吾々は修養の力に依りて人格は随分改造する事も出
來やうが、此身が直ぐに庭前の栢の木になると云ふ様な事は是は特別であろ
う、併し一たび此沒滋味なる公案に向つて專一に工夫する時は、自然と己れが
と云ふ我見は無くなる。修行して息まざれば徹底無我大解脱の境界にも進み、
此身の全體が公案になり切つてしまふことが出来る。隻手の聲などは何でも
無い、未だ隻手を出さざる以前に、天地に震ひ渡る程の響のある事を聴取する
のであらう。若し師家が隻手の聲は如何じやなぞと云つたら、其手を一つ叩き
つけるが宜い。吾々は空劫以前、即ち此世界の出來ない以前から此聲は聞いて
居る。今になつて隻手の聲などは何の閑妄想である、師家を取て投げる位な
勇氣を鼓して猛烈に工夫して見なさい。斯く精神を込めて參禪せば自然に庭

前の栢樹子と云ふ意味も分かれば又非思量と云ふ境界にも爲れる、さうして自分の精神が始終寂靜不動の地に安住して花街巷柳に在ること深山幽谷の如くである、そこに於て始めて「坐禪せば四條五條の橋の上、往き來の人を深山木に見て」と云ふ境界になれる。

彼の有名なる東臯心越禪師は、水戸黄門光圀卿の御歸依を受けられた人であつた、中々大徳な御方であつて、殊に豪邁なる膽力があつたは全く禪に依りて鍛錬せられたものに相違ない、或日黄門卿は心越和尚を招き、サア今日は無禮講で、二人限り水入らずに樂まうじやないか、(禪師)有り難うございます、(光圀卿)今日は愉快に山雲海月の情を語り暮さうといひ乍ら大盃を擧げサア手が手づからお酌をしてあげよう、心越禪師は多少酒を用ゐられたものと見え、それじや有り難く頂戴いたしませうといふ中にかれこれ一合以上も入らうと思はれる程の盃に近侍の者が溢るゝ計りに酒を注ぎました、和尚は夫れを手許に引きよせて、今や飲まんとする一刹那、耳元に於てドーンと大砲を打つた、恰

も百雷の一時に落つるが如く、實に凄すい音響を發した、定めしこれには和尚も驚くだらう、手元が狂つてお酒でも溢しはせぬかと豫て水戸卿が膽力試験の意で巧まれたことであるから、ジツト見てござつた、所が心越禪師一向知らん顔、丸で雙の様である、公もサツパリ張り合が無い、夫れ程な大音響もチツトも感じないやうじや、卿の曰はれるにはイヤ和尚サゾ驚いたろう、併し武士たる者として城中の習ひだから氣にかけられるな、今太平の御世とは云ひながら、治に居つて亂を忘るべからず、依て常に戦争時代の如く大砲術を訓練せしめて居るのだ、和尚は平氣なもの、ハ、ア左様でござるかといふたまゝ、驚いたとも驚かぬとも何とも云はない、恐れながら只今戴きし御盃謹んで御前に呈します、和尚お前酌をして呉れるか、今日は私がお酌を致しませうとなみ／＼と注いで、氣に入つた和尚の盃であるから、光圀卿も悦んで注いでもらい、今や此方へ手を引かうとする、和尚は「喝」………と大喝を下した、さうするとさすが天下の豪傑と云はれた光圀卿も出し抜けの一喝にブル／＼と手元が振い

酒がバラ／＼とこぼれた(癪)和尚そりや何んだい(和尊)ハイ是れは禪僧のなら
ひ悪からず御思召下て置かれるやうにと云つて直ぐ返報をされた、それから
は水戸卿は心越禪師に一層深く歸依を致されたと云ふが、斯の如き膽力こそ
實に不動の大勇とも謂ふべきものが中々一朝一夕に得られるものでない、ど
うか吾々御互も常に精神を鍛錬して、坐禪をする時斗りてなく、平常の一舉、手
一投足の上にも禪的觀念を以て、非思量の心地即ち大無我の境界に進むの修
養がありがたいものです、坐禪を實行するには決して時と處とを擇ばぬ、前に三
縁と申したのは、正則に修行する所を示したのです、忙がしい方杯は、平常に心
をかけなされ、多少心の動いた機會が却て宜い、腹の立つた時、非常に腦を使つ
た時、心配事のあつた時、極悲しい時などが寧ろ好機會です、お宅の佛間の穢な
少し静かな所で、縦ひ二十分間でも三十分間でも坐はり込んでごらんなさる
が宜い、時としては坐禪の儀式によらず平坐のまゝでもよいから、深呼吸的に
調息することは必要であらう、夜分なれば、寝る前に蒲團の上に坐はる、二十分

間でも三十分間でも宜い、之は決して禪宗の信者となつた人ばかりに頼める
のではない、真理の信者になつてする坐禪です、モツト適切にいへば自分の本
心の信者になつて坐禪をする、自分の身体の信者になつて坐禪するのであり
ます、之だけは是非實行して貰ひたいものであります、併し此禪の効果を奏す
るには平素の心得即ち平常の修養が最も大事である、中身次に於いては修養
上に就てお話を致す積りであります。

第七章 修養の標準

茲に最後に修養の標準と云ふ事に付てお話し上げてをきます、此修養と云
ふ語は今日の流行の辭であるが、佛教に於ては古來より之を修行とも、行持と
も、操行とも稱して居ります、修行と云ふも、修養と云ふも、別に變りは無いの
で、有りませんが、併し此修養と云ふ語が最も面白い、意味の強い熟字がある、申す迄
も無く修といふ文字の本義はホジシ乃ら乾した肉と云ふ義があります、肉を

乾し固めまするには、先づ肉の腐敗分子は悉く之を取り捨て、純潔なる肉だけ
けを十分に乾し固めますれば、縦ひ三ヶ月たとうが五ヶ月たとうが立派に保
存して置く事が出来る。今日の吾々の修行も亦其通り吾々の精神を腐らす所
の私情私欲、煩悶妄想の腐敗分子は悉く切り捨て、しまうのです。詞を換へて
申せば従前の性癖を矯正する、即ち悪い癖を改める、所謂己に克つて私を制す
るのです。そうして充分に鍛錬を加へて心を中正の處に落ちつけて健全に固
めてしまふ、之が修と云ふ文字の意味で有ります。次に養と云ふ字は云ふ迄も
無く培養すること、總ての物は皆な養育の力に依て健全に成長致します。田
畑に於ける穀類庭園に於ける草木の如きも養ひ其宜しきを得る時は忽ち繁
茂するのです。養ひ其宜しきを得ざる時は忽ち枯れ凋んでしまふ。況や人の此
世に生るゝや必ず養育の力を借りて以て始めて成長の功を現はすことは萬物
の中最も甚しい方である。養育にも身と心との二つがある。肉体に於ける養ひ
の必要はいふまでも無いが、精神上に於いては一層養育の助けを要するので

ある。それで教育の事を教養とも申す、即ち教育の力に依て、智識を養ひ、道徳
性を養ひ、益々之を健全に發達せしむるのであります。之をやまと詞で申すと
「まま」と云ふことに當ります。昔は子供に乳を飲まして養育する、唯今の乳母
の事をも「まゝ母」と申したそうです。即ち養ひの母であるからです。今日では繼
母のことをまゝ母と稱へる。又他人の子を貰つて我子として育てるものを「ま
ま子」と云ふ。それが今日では「まま」と云ふ辭が、何んとなう情愛が親しからぬや
うに聞へます。乃ちまゝしいなど、申すと一種の厭味を帯びた語のやうな意
味がするが、本來はまゝと云ふ語は養ひの義であるから、最も親しい情愛を
含んだ語です。吾々の肉体を直接に養ふていく食物中最も主たる物は無論か
米である。故に其お米の事をも「まゝ」と稱して居る。矢張り養ふと云ふ意味なの
です。人は養育の力に依て次第々々に体軀も成長して遂に一人前の者になる
のであります。ソコで修養と云ふ語は甚だ範圍が廣いです。併し今は精神の修
養に重きを置いて御話する積りである。修養の第一は吾々の性癖や悪習慣

を矯正して本然の智徳を發達せしむるのであります。依て其の精神若くは肉体に於ける有らゆる缺點或は惡習慣を切り捨て、極純潔なる正しい精神を發揮いたし、其性能を益々鍛鍊して、圓熟の境に進ましめて行くのが之れ修養の意味であろうと思ひます。して見ると禪の修養と云ても別に變つたことをするのでは無、ツマリ禪定又は禪門の行持を修養の土臺とし、之れに依て智能を啓發し、道徳を精鍊して以て其の性能を現はし、其の人格を向上せしめてゆく、之れが禪の修養であります。さうして見ると、先づ以て禪門に於ける修養上最も確實なる標準を開示し、之れに依て修養の歩を進めて行く様にせねばなりません。尤も禪門の標準といへば禪定そのものが標準ではありますが、それでは初心の者にはチョツと方針が立ち惜いから禪を根底としたる具體的に適切なる標準を示すの必要があらうと思ふ。依て此にそれをお話し申したのである。是は吾人の日用に履踐すべき極めて着實なる問題で有りますから、十分御了解を願ひたい。前には禪の實踐法即ち禪を實修する上に於ての

儀式及び心得を申しあげましたが、ソンなら禪を實行さへすれば直ちに大悟の効果を奏するかと云ふに、中々そうはいかん。故に禪を實踐して完全圓滿なる成巧を見やうと云ふには、平常の修養が殊に大事である。よしんば座禪三昧に入るにしても、平常の修養が無いと動もすれば病的の禪に陥るので、尤も平常の修養を重んずることは、單に禪計りには限らんけれども、各宗各派等に涉りて、お話をして居る餘地が有りませんから、今は専ら禪門を中心としての修養談をするのであります。併し此修養談がやがて他の宗派の説く所と一致する點があらうと思ひます。

〔一〕 修養の四病

先づ修養の最初は心の病を治するか、又は其の病を防ぐにありませぬ。其の病とは圓覺經の中に作と止と任と滅との四病が説いてあります。凡て禪を修する以前より以後に涉りて動もすると此四つの病に罹る。これは、修養が足らぬ所から起る病です。

第一、作病此の作病といふは作は作爲と熟字して總て妄想心を以て作爲して止まざるをいふ、乃ち常にいふ已見若しくは我見のことです、自分の了簡を先きに立て、種々の經營を爲すものは皆な一の妄想たるを免れぬ、之れが作病であります、縦ひ坐禪をして大悟の味が知れたといふても、若し一點私心の存するあらば其の悟といふものも舊きに依て名利の奴隸となり易いじや、元來人間といふものは大概一種の性癖がありてそれに執着したがつてならぬ、例へば氣の短い人があると、巧遅は拙速に如かずなぞといふて、妄りに早くすることを貴ぶ、禪僧杯には事に依ると有り勝な癖がある、野菜物一つ切つても手ッ取り早く亂暴な切り方でもしてあると、此の切り方には禪機があるなどといふ、併し是等を禪的であるなどといふのは甚だありがたからぬ禪的ですが、どんな人でも性癖又は習慣的癖執はあり勝なもので、叡山には慈圓僧正といふ有名な高德のお方があつた、此僧正が歌道に大變熱心で古今の達人でありました、其時分は戀歌が非常に盛であつたのです、人情を緻密に寫すには戀歌

が最も適切であるといふので、戀歌には最も力を注いだものである、堂々たる比叡山の僧正でありながら、時としては戀歌杯をも作て居られる、そこで或人が非常に慨嘆して僧正には近頃流行る戀歌を非常に御作りになります、が、歌人ならば兎に角苟くも人天の導師として模範ともなるべき僧正が、狂言綺語に類する歌の様な飾り辭を愛して、それに耽つてかいでなさるといふ事は甚だ宜しくないから、速に歌を作ること杯は、今後お止め下さる様にと云つて忠告をした、其忠告は喜んで請けられたが、其御返答に

人ごとにひとつの癖はあるものよ我れにはゆるせ敷島の道

といふ歌を詠みて送られた、即ち人には必ず一つの癖はあるものと聞く、吾れには和歌の道だけは止め難い癖であるから、勘忍して呉れよと云ふ意味であります、又或所に立派な人ではあるが誠に品の悪い癖を持って居る人がありました、即ち何物を見ても必ず價値を附ける癖がある、場所に依ては甚だ失禮になる、餘所へ行くお茶が出る、そのお茶を一口飲むと、ハア結構です失禮ながら

是は二圓位のお茶ですなア人が羽織の新しいのでも着て居ると、貴公の羽織は幾圓其紐は幾十錢、此お酒は幾十錢此烟草は幾らと一々品評して値を附ける、實に品の悪い癖じや、或る友人が親切に忠告をした、君は立派な人間であるが、唯一つの悪い癖がある、他所へ行きて到る所の品物に値段を附けると云ふことは甚だ無禮である、君にして此癖があるといふは實に遺憾な次第であるから、今迄の様な値段附けは全廢せにやならんといふて聞かせた、彼は熱心に其忠告の辭を聞き成程自分の癖は自分には知れぬもの、君の忠告に依て始めて自分にさういふ癖のあるといふ事を認めた、大に慚愧致した、君なればこそ親切にいふて呉れる、君の唯今の忠告は實に千兩の價值があると申したそです、矢張り其の癖が出た實に癖といふものは容易に改めにくいものであります、思はず餘談に渡りましたが前に申せし如く、自分の性癖を矯正するを主として修養するには、何所迄も心を中正の方に導かねばならん、其中道の正しきを得ず、萬事萬端妄想を先きに立て、ゆくのが作病であります。

第二、止病しびや此れは昏沈に陥つて一切の活動を停止するのである、刈苴道心杯が深山の中に入り、人世に遠ざかり、夫婦親子の恩愛をも断ち切つた、これらはなんとなく高尚純潔ではあるが、佛教の本義より申すと、此の活動すべき人生の中に在りながら、強ちに其の活動を停止して、山の中に逃げ込むといふ様な事は是れまた一の病である、尤も或る修養の目的の爲めに一時の方便を以て修養上山中に遁るゝといふならば決して悪くはない、下度學生が家庭を離れて學校に入ると同じ事です、自分が修學の目的を達せん爲め親兄弟の膝下を離れて學校へ入學するは少しも悪くは無い、併し學校が一番安心じやからといふて卒業しても學校の寄宿舎を離れぬといふては丸で修學の目的に反する、人もその如く人生を離るゝは再び人生に返へりて救済するが目的じや、若し社會を捨て、しまつては折角社會救済の爲めに修行をした甲斐も無い事になる、昔はこらいふ人が禪門の高僧に澤山あつた山を下らざる數十年などいふ嵩高なる方も少くない、これらは修行の力よりいへば貴ひ行ひといは

ねばならんが、抑も佛教の目的は衆生濟度即ち濟世利民に在るのであるから、唯だ獨り解脱し得てそれに止まつて居つたならば是れも亦一の病的であります。之を止病と申します。

第三、任病、任病とは所謂放任主義に流れるのです。何事も因縁に打任せ成り行きに打ち任せて毫も心思を施さぬ所謂高等なる自然主義じや、どうでも成るやうに成るものじやと諦らめて世の中を無造作に平氣で送て居る、一休和尚などといふ様な御方の事を悪く真似ると此放任主義になつてしまふ。

面かげの變らば變はれ年も取れ無病息災死なばこつくり

何にも頓着するな、好きな物は喰べるが宜い、見たい物は見るが宜い、聞きたい物は聞くが宜い、雀はチウ〜鳥はカア〜皆なそのまゝの佛法じや、死ぬるもよし、生るもよし、飢えたれば飯を喫し、困じたれば眠る、是れがそのまゝの實相だ、杯と呑氣に構へて居るが悟りじやといふのは矢張り無病です。支那の三國時代に世間から好し好し先生と云はれた司馬徽といふ學者があつた、人が

何をいふて來ても好し好しといふのが癖であつた、先生昨夜向に火事があつたさうです、好し〜、彼方の内へ泥棒が這入つたさうです、好し〜、近所に子が生れたさうです、好し好し、隣の亭主が驅て來て、先生貴公がいつも可愛つて下された私の可愛い子供が誰今死にましてございます……さうかよしよし、隣の人は呆れかへつて厭な顔をして歸てしまつた、後で女房は氣の毒に思ふて、どうも檀那が貴公はなんぼよし〜が御自分の專賣特許でも、人が不幸を訴へて泣顔して來た者にはよし〜は餘りひどいと云ふものです、モト少し御挨拶の仕様もあるじやございませんかと、如何にもさうだ、其方がいふ事もよし〜といふさうである、之れは極端なる放任主義の例です、絶對界に安心の根據を据えた眼より見れば、人生の盛衰興廢も夢幻の如く見ゆるから、ソナなふうになるのであろう、ソコデ禪宗の僧侶中にも向上の眼を以て人世を洞觀し、人生は空華の如く夢幻に似たり、何を執着し、何にか迷はん、徒らに人間の力を以て左右せんとするは自ら其苦しみを招くに過ぎず、天真即佛法な

りといふ様な見知から、此の放任病に採りつかれてしまふ事がある。禪宗の僧侶は比較的磊落だといふがある、之にも長所のあると同時に短所もあつて随分病的のものがあつて、一面から見ると形式に拘はらず人事に屈托せざるは頗る立派なやうであるが、佛教綿密の道德眼より見る時は是れ亦一種の病である。何物が來るとも少しも驚かぬどんな不幸に遭遇しても泰然自若として動かす、火は上ぼるもの、水は流れるもの、夏は暑いもの、冬は寒いもの、大概が定まりの世の光景、是れ實に天然に定つた姿の妙相だ、一心生ぜざれば萬法に答なし、その萬法の相に迷ふには及ばん、そのまゝに打ち任せて、少しも動着せぬといふは自己の大解脱を得ることありとするも慈悲哀憐の徳用は發せられぬ、活眼より見る時は僅かに一隻眼の人たることを免れませぬ。

第四、滅病、此の滅は寂滅の滅です。寂滅とは從來の煩惱をスツカリ断ち切つてしまつて、丸で薪盡きて火滅するの狀態になるのである。コ、ニ腰を据へると滅病になる、併し此境界にまで達することは容易で無いが、一切の煩惱を断

じ盡くして大死人の如くになつてしまつては、所謂百尺竿頭の死漠である、大死一番の後再び蘇生するの力が無ければ活作用を現はすの分は無、故に之を滅病といふ、優婆塞戒經に

諸の煩惱業は即ち是れ菩薩道莊嚴の伴なり

とありますが面白い御示しであります、菩薩道とは菩薩の學ぶ道である、ツマリ佛の道のことです、煩惱業は佛の道を莊嚴に飾つてくれる道具である、又好同伴である、人には其天性として欲しい惜しいといふ心がある、それが貪欲となる、憎いといふ心がある、それが瞋恚といふ、煩惱になる、又可愛いといふ心がある、それが愚癡になる、此等の惜しい欲しい、憎い、可愛いといふ心を捨て、しまつて、惜しくもない、欲しくもない、可愛くもない、……斯うなつてしまひば全くの寂滅である、それは絶對界に歸したのであるから立派です、立派ではあるがそれでは佛様の身體の飾りで無くなつてしまふ、何せかといふと自分の法身即ち精神だけは立派な佛様であつても、其身に福徳慈愛の光明が無い、世の

中を照す力が無い、それは法身といふて働きの無い佛様じや、元來吾々の修行といふものは自己が自己を制し、自己を啓導し、自己を運用するの法である。故に煩惱を憎まずして之を利用し善用して行くのが佛様の大智慧である。唯だ煩惱を断じ盡すのが、佛陀の本領だと思ふと大變な間違を生じます。換言すれば佛法の修養は煩惱を断じて無心の状態になりきるので無く、煩惱を巧みに使用し調御して行く處に在る。例へば學校の先生が子供を教育してゆく様なものじや、子供は皆幼稚にして分別に乏しい、其子供の中には往々先生の教へに反對する行動を取る者も有る、又一向に規律を守らぬ者もありませう、或は騒がしい五月蠅い子供もありませう、併し其の騒しかつたり、不規律であつたり、言ふことを聞かなかつたりする所の、多數の子供を憎んで、夫を盡く退けてしまつたでは教育は出来るものでない、種々様々なる面倒な子供をば残らず學校教場に收容して、今迄騒しかつた子供をば穩かにさせる、不規律であつた者に規律を守らしむる様に教へ導いて行くのが教育の實である、即ち子供を

調御し啓誘するのである、吾々の精神上に於ける煩惱の意業も亦た是くの如く捨て、置けばそれが即ち罪惡の源となるのである、其罪惡の源となるべき煩惱を巧みに制御し調和して、悪い方に向けぬ様にし、善い方へ〜と進めて行くのじや、さうすると今迄欲しい〜と思ふて妄りに欲情を發した心が一變して、最も氣高い、最も確實なる大希望大目的に向て不屈不撓に奮進して行く大願力となるのである、是れ吾々の欲情を巧に利用し善用するのであつて、やがて従前の煩惱が直に佛陀の道を裝飾する道具となる、言ひ換れば一の美德となるのです、其裝飾の中に神聖なる威嚴を存する意味から、莊嚴と申したのであります、又惜しい〜といふた心が、何事も乱雜にせず、能く自他を保護するの徳と成る、此徳を佛の三徳に配すれば、智徳となります、又惜しい〜といふた心を巧に御して行く時には、決斷の徳を現はす、惜しいといふ心は物に反抗して行く、即ち反撥性の現はれであるから、己れやれといふ勇氣を起すじや、この勇氣あればこそ惡魔をも降し、迷執をも断じ殺すといふやうな靈機を發す

るじや禪宗には随分佛を殺し祖を殺すといふやうな亂暴な辭があるがこれは總ての執着を截斷するの勇氣です、之を佛の三徳の上では斷徳となるのです、それから可愛い／＼といふ念も畢竟一時の幻影に對する迷ひより生ずるが多い、人の姿に迷ひ、又は親子の愛着に繋かれ爲めに、自分の守るべき天職をも空うするといふ事にもなるが、それを巧みに調御する時は、其可愛い／＼といふがそのまゝ同情慈悲の働きとなる、夫が進んで行けば社界の人類を救済するといふ、最も高尚優美なる慈悲仁愛の作用となる、可愛い／＼といふ一念が段々發達して始めて光明嚇々として而も温かさ佛國土が出来てくるのである、之を佛の三徳に配すれば道徳となる、所が此調御法を知らずして、唯むやみに煩惱を恐れ、業作用を恐れて玉石ともに滅却するに至るのは滅病で何等の働きのないことになります。

〔二〕 功勳五位の徳

然らば吾々が禪門の教訓に基つきて眞の修養を積むにはどういふふうにし

てゆけば宜いかといふと、これに關する古今の教訓が澤山ありますが、中に就き達磨大師十一代の祖師洞山大師の御示し下された功勳五位といふがあつて、實に千古の大典型でありますから今それを以てお話し致さうと思ひます、サテ功勳とは修養の意味と同一です、吾々が修養を積む時には一歩／＼に成績が現はれてくる、それが功勳です、その功勳の差等を五段に分かつたのが五位であります、即ち第一が向の位、第二が奉の位、第三が功の位、第四が共功の位、第五は功功の位です、尤も此の五位の理を委しく御話する事に成ると込み入つて来て充分に御話盡くすことが出来ませぬにより今此には唯だ大意だけを申し上げて諸君の修養の標準に資することゝ致します、
第一、向の位、向とは即ち自己の向ふ所を確定すること、發心の位です、志を發して目的を定むる位である、お互の修養上最初に必要なるは立志である、志を立てつるは事業の「中なり」と西哲もいふて居る、確固不拔なる志を立てさへすれば既に事業の半ばを成就した様なものです、如何となれば志をして堅固なれば

ば所謂精神一到何事か成らざらんで、キツと其目的は達せられます、凡そ人間の思想なるものは、或る機会に於て突然に起つたもので、遂には永久の習性と成るものじや、人間の精神の發動する状態を宗鏡録等には五心に區別して説かれてある、その五心とは

第一に率爾心（しつじこころ） これは率爾といふてヒヨコツト發生するの心である、例へば講習會で開かれたと云ふに、一つ往て聞て見やうではないか、さうだな往て見やうかなと、突然に起り出す心を率爾心といふ、併しこれはマダ無邪氣な方であるから直ぐ消へてしまふ事がある、此心が一轉すると、第二の尋求心（せんぐしん）となる、それじや會場は何處か、何日から始まつて、時間はどうだらうといふやうな事を尋ね求める、それからどうしやう、かうしやうと種々に思考して愈々とうと決定するのが、第三の決定心（けつじやうしん）である、マウ一度決定すると、善とか悪とかといふ一つの看板が懸つてしまふ、それが第四の染淨心（せんじやうしん）です、染とは染り汚がれるといふ意味であるから、悪の方になる、淨は清らかにするといふ字であるから善

の方になる、一旦心が決定すれば善とか悪とか、ドチラか一方に定つてしまふ、さうすると、悪なら悪の方に精神が固つて聯續する、善なら善の方に心が相續してそれからそれと心に相應したる聯續作用を起すのが第五の等流心（じやうりゅうしん）であります、一たび悪い丁簡が起つてそれが固まりまするとマウ翌日になつても離れない、チャンと腦裡に潜伏して何等かの機会を待て作用を起す、善い方からいふても其通りの作用を發します、故に縁に觸れる度毎に其善又は悪の心が現行する、若い時分にでも一度何かの機会に於て、佛様は有難いものぞといふ信仰心が起りますると、久しく信心を忘れて居ても何かの縁に觸れては再び有り難いと云ふ信念が發起するものであります、之れと反對に、一度悪念を起して置くとは何回でも其悪念を續出するやうになる、而して其源は第一の率爾心に出づるので、故に率爾心は至つて薄弱の様では有るが中々油斷のなからぬ慎しむべき心である、之が地獄極樂の境界を生ずるの源であります、支那の墨子といふ先生は餘程修養の心懸の深い人で、白絲を見ては泣て居つたと

いふ、人間の心は此白絲の如く、一たび之を染らればマウ元の白絲には歸らぬ、吾々の心も今は白絲の如きものであるが、突然起る率爾心の如何に依て赤くなるか、黄色になるか、善になるか、悪になるか、解らんといつて嘆かれたそうじや、吾々の精神も實に白絲の如くであるから常に注意を怠らぬやうにせねばならぬ、此決定心か修養の大目的の上に現はれたので向の位です、即ち發心位である、此發心乃ち志が起らぬ時はどんな善い事でも之を實行する事は出来ぬ、お金があつても志が無いと之を利用する事能はず、學問があつても志が無いと之を應用する事は不可能であります、吾々お互で眞實佛教の堂奥に進まうと云ふには先づ以て眞面目に且つ着實に佛教に隨順したる目的を達する方法を研究して確實なる信念と行願とが確立すれば其人はマウ片足を佛陀の聖域に突き込んだも同様であつて、所謂事業の央ば成功の央ばであります、即ち古歌に

爲せばなる爲さねはならぬ成るものを成らぬは已が爲さぬなりけり

とあるが實に其通りです、吾々の志だに鐵石の如く堅固であれば、如何なる事も必ず成功するに疑ひない、故に先づ以て目的を確立して之れに向ふの志氣を立つるのが第一の要件である、是れが向の位であります、

第二、奉の位、奉とは遵奉又奉順の義で、一旦志を發して目的に向ふた以上は他逆其志を守り、其目的の道に背かず、從違兼夜無間斷に道に進んでゆくので、例へば盆栽を作るにしても、梅なら梅と云ふ物を鉢に植えたなら、或は日の當る所へ之を出し、或は日蔭に之を置き、或は風當りのよい所に出し、或は水を注ぎ、様々に手を盡くして始めて美しい花を見る事が出来る、菊の如きは秋に至りて見る花でありながら、春のうちより手入れをして行かねばならぬ、

今日になりて菊作らうと思ひけり

といふ句がある、美しく咲いた花を見てから、それじやあ私も作れば宜かつたといふても間に合はぬ、春から夏の間に手を盡した骨折りであればこそ秋となりてから無限の樂みを得るのである、この骨折りが即ち奉の位じや、修養中

の修養じや、一日修養すれば必ずそれ丈の効果が現はれるに相違ないと信ずれば骨折が寧ろ快樂である吉田松蔭先生は廿九歳の時、幕府の忌む所となりて縲紲の辱を受け、さうして遂には小塚原の露と消えてしまはれたが、明日は愈々死刑の場所へ引き出さるゝと云ふ迄獄舎の中に於て孟子の講釋をして居られた、門人がどうも先生マウ明日には此首を切られてしまふと云ふ場合、それに今に於て子の曰くを習ふても仕方が無いじやありませんかと云ふと、愚かなることを申されるな、吾々は道の爲めに身を捧げて居るのである、死ぬる生きるといふものは自から天命の定まる所、復た何をか恨みん、人一日此世に存せば一日の道なかるべからず、縦ひ二日や三日は、喰はず着ずに居ても凌げぬこともないけれど道と云ふものは人生一日も缺くべからざるものである、故に予は孟子の章句を講ずるにはあらず、是れ賢き道を談ずるのだと云はれたさうじや、道の爲めに盡すことは縦ひ獄中に在り乍らも毫も平常に異なることなく、泰然として孟子の講義を續けて居られました、流石に吉田松蔭先

生は大人物である、其刑に臨むや、母親の心情を察してさしも大丈夫兒も覺えず涙を流し

親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何んときくらん

といふ一首の歌を詠せられた實に天地を動かし鬼神をも泣かしむるの感があります、

身はたとひ武藏の野邊に朽つるともとどめおかまし大和魂

先生の大精神は萬世の後に至るまで決して死んでは居らぬ、永く國家の爲めに護國の靈となつて盡くして居る、縦ひ學は百科の精を極め、文は唐宋の大家を歴するの技倆ありと雖も、若し我が精神が眞實道に奉順し道を守守するの大志が無つたならば、其人は終に書物箱たるを免れぬ、學問の道具たるに過ぎない、學問の有り無しに拘らず、専心一意從盡至夜己れの目的に趣向して身命を惜まず、道を守り道を行なひゆくといふのが奉の位であります、

頼山陽が京都に在りて、日本史を著はされた時に、山陽の友人が有名なる太合

和尚といふであつた、真宗の僧侶で學問もあり、書も出来る、俳諧にも巧みであるといふ餘程多藝な人であつたと見へる、其の太合と親しく交はれる易行院法海と云ふ學僧は、其頃の真宗の高倉學寮の學長をして居られた、太合和尚も法海上人の後を受けて學長となつたといふことだ、此法海上人は傑出したる人物であつたから、山陽も竊かに其徳を欽慕してどうか一返遇ひたいと思ふて居られる、太合和尚はそれを聞いて或日山陽を連れて、易行院法海上人の所を訪ふた所が易行院といふ人は極單純な飾りもお世辭も無い方であつたらしい、太合和尚が今日は有名なる日本外史の著者頼山陽先生をか連れ申して参つたと申し入れたが法海は黙つて見臺に向つて書見をして居る、再び今日は頼山陽先生をお連れ申しましたと云ふと、ジツトこゝろ白眼で居たが下手な達摩さんのやうな顔付をして、「何に頼と云ふ人を連れて來たとやハ、ア此頃話しを聞くと、安藝國の儒者に頼久太郎とか云ふ者が京都へ來て、楠公の忠節義勇を後世に傳へたいとやらで楠公の傳記を書き、それに前後の關係を附

け加へて、何にやら外史とか云ふものを作つたとか云ふ事を聞いて居つた所が人々の話しを聞くと、彼れは國元に父が死なれて唯だ一人の母親がある、其母親は深く我子の事を案じ暮して遇ひたがつて居る、然るに母親を國元に置き放しにして三年間も國へ歸らず、自分は京都の立派な宿所に居て夏になると肌を脱ぎ、胡座をかきつゝ楠公の傳記を書いて居るとやら、頼山陽は傍で聞て居る、怪しからん奴だ、忠臣は孝子の門に出づるものじや、頼久太郎の如きは親不孝の者だ、さう云ふ不孝者には恐らくは忠義の心も深くはあるまい、忠義の心薄き者杯は楠公の傳記を書くべき資格は無い筈だ、親不孝な人間に身分の傳記などを書かれるかと思ふたら、恐らく楠公は草葉の蔭で泣いて居られるたらう、そんな怪しからん奴を連れて來ると云ふ事があるものか、速に歸て下さい、暇潰しなこと邪魔になるわいといふた切り知らん顔して見臺に向つて居る、頼山陽も汗を流したが、案内をした太合和尚も氣の毒で、たまらん早速其室を立ち出で、先生嘘お腹か立つたでありませう、先生の忠義、先生

の御精神誰でも知て居る。然るに人の噂などを聞きかちつてよい加減な判断をなし、ムキツケにあんな事を云ふとは無禮さわまつて居る。あゝ云ふ頑固な性分でありますからどうも仕方が無い。先生今日の處はどうか堪忍して下さいと云ふと、頼山陽はイヤさうでない。君はさう思はれるか知らんが決して心配下さるな。今法海のいはれた語は全くの道理である。さすれば本願寺の高倉學寮の長を勤めて居る人だけあつて、まだ格別じや、日本國中に此の山陽に向つて、あれ程の苦言をいふ者は恐らく他にはあるまい。唯今の小言こそ山陽の身に取り生涯の誠めである。此胸に針を打たれた様な感じが致したといふたナスガ山陽は大人物です。易行院の一言を非常に感服して、翌朝は直に安藝國へ向け、母親に逢ふ爲めに出立したと云ふ事であります。頼山陽とも云はれる程の立派な學者でも、若し其行ひに於て忠孝の二道を固く守るといふ事が無つたならば、どんな名文章を以て忠臣孝子を世に紹介する技倆はありとも、未だ奉とは申されぬ。故に疑ても覺めても自分の志に背かず、目的の道を忘れず

何處迄も初志を確守して行くのが、奉の位である。故に奉の一位は吾々の修養上最も必要な事であらうと思ふので有ります。

第三、功の位。此れは一旦確固不拔の志を起したならば、其志を守りてドコ迄も忠實に修行し、忠實に修養を積んだ結果茲に其の成功を見る。即ち、其の目的と達する、之が功である。此功にも一部の功と全部の功との二つがある。一日修養すれば一日丈の効果が擧つて参る。一年の修養を積めば一年だけの効果が現はれる。例へば學校に於て、年毎に學級が昇進するやうな鹽梅で、年一年と修養の効果を奏して参る。それであるから全分の功を奏し盡すと云ふ事は、極て前途遼遠で有りますが、一部の功は何人でも得られます。其功が次第に發達し圓熟して終には全分の功を得るに至ります。全分の功を得た境界はどうかといふに、即ち佛陀の聖域です。佛陀の聖域といふは智徳を圓満した境界をいふのである。修養と云ふても別にかはつたことは無い。矢張り智慧に於て圓満を得る。徳相に於て圓満を得るが爲めなのである。眞諦門しんたいてんから申しまして、

俗諦門ソクテイモンから申しましても、成功したる佛果の内容と云ふと全く智徳の二つに歸するので有ります。大信念を土臺として人生以外に智徳圓滿なる佛陀の聖智妙徳を歸崇し、其の佛果位に達するを最も理想となし、我意我見を放擲して其理想に向て信念を増進し、修行を實踐して行くのが眞諦門です。又人生に處して上を敬ひ下を憐れみ善を修め惡を離れ以て人間の道を全ふし佛陀の徳を運用して進で行くのが所謂俗諦門であります。眞諦俗諦其趣異なりと雖も智徳の圓滿を期するに至つては不二である。其智徳の圓滿と云ふのも、ツマリ人々本具の徳性を發揮して宇宙の妙徳、天地の本性と一致して身を以て道とし、心を以て道とし、身を以て道とし、心を以て徳とし、更に進んで法界平等利益の大慈悲光を顯現したのが智徳の圓滿と稱するのであります。

甲州慧林寺の開山快川和尚カクヰンウシヤウは有名なる禪僧である。曾て武田信玄の歸依を受け其請に應じて美濃より甲州に來り大に武田家の國政をも助けられた人であつたが、信玄既に没して武田の勢力日に衰ひ嗣子勝頼は遂に天目山に於て

討死をして、さしも名譽ある武田の系統は茲に斷絶したのじや、其後に至ても快川和尚は尙ほ武田家の再興を祈つて居られた。織田信長は和尚の徳を慕ふて再三招かれたが應じない。ソコで大に立腹致して、慧林寺へ三百人の軍勢を派し暴力を以て和尚を服せんとした。若し今の中に命に服するどあれば宜し、さも無くんば此寺を焼拂つて汝等諸共に焼き殺してしまふぞと嚇した。快川和尚は少しも動かん命を惜んで志に背くは人間の道に非ず、争で身を惜んで武田の恩顧に反くべけんやといふて、ドウしても應せぬ。短氣の信長大に怒りて寺の本堂に火をかける。快川和尚も火の中に居る譯にゆかんから山門の二階へと登りました。其時相從ふた僧侶殆ど數十名、スルトこんどは山門の下へ薪を山の如くに積で、之れに火をかけた。數十名の僧侶は快川和尚を中央にして何れも二階に於て坐禪をして居る。マウ火焰は渦を卷いて山門の二階に漲ざり入る。其時に快川和尚は大衆に向つて

諸人者大火焰裡に向つて如何が大法輪を轉せん

といふ釣語を下した。之れは禪宗に於て一同の所見を調べやうと云ふ時の語で之を釣語といふのです。此大火燄の中に於ての佛法はどうじや、安心はどうじや、體中に火が燃え附くと云ふ場合こそ吾々の大安心を決定すべき好箇の機會じや、これが出來んやうな佛法は講釋佛法、口先佛法である。ソナ佛法ではマサかの時の役に立たん、數十名の大衆は丸で夢中に成て問答を始めた其答辯には喝と云つて大喝一聲した者もあつたらう、無と云ふて答へた者も在つたらう、色々の機用を呈したでありませうが、マウ衣の袖や裳に迄火が燃え附く様になつた、最後に至りまして、快川和尚は大音聲を揚げて

安心何ぞ必ずしも山水を須ひんや、心頭を滅却すれば火も亦涼し

と之れが末後の句であつた、眞箇の安心は高山流水の閑寂の地にのみ在るべきものに非ず、觸處々々の佛法じや、徹底無我解脱の境に達する時は、燄々たる大火も涼しいぞ、其辞の將に了らんとする時、山門の屋根がドット墮ちた、數十人の禪僧達は盡く火燄の中に葬られてしまつた、快川和尚も坐禪をした、儘從

容として火定に入られたと云ふ事でありまも、是等は非常な場合に於て非常な禪機を現はしたものである。快川和尚の如きは平常に於て既に眞箇の大安心を得て居られた人であつたからこそ、斯かる場合に際して壯烈極まる動作が出来たのである。是は決して完全なる成功の手本とする事は出来ぬが、安心不動着の境界を得たのは實に一部の成功として立派なものです。併し世の中は唯だ自己のみの成功では未だ完全なる成功とは謂はれませぬ、必ず社會一同と共に其の成功の徳を樂しむことにせんければなりませぬ、ソコで五位に於ては更らに進んで其の功を共にすべき所以たる共功を説きます。

第四、共功の位實に我國は今日以後益々國家の爲めに忠義を盡さねばならぬといふ御勅語の思想を鼓吹して十分響き渡らしめ、益々愛國心を養成してゆかねばなるまいと思ふ、何せかと云ふと海外の制度文物を輸入して日本の文明を致した結果は自然海外の方へ心が散り易い、殊に國家の發展と與に海外思想は益々發達して參いる、海外思想の發達は甚だ宜い事、益々之を獎勵

せねばならぬが、之れと同時に自分の脚下なる國家的觀念が動もすると薄ら
きはせぬかといふ様な恐れがある。おまけに多數國民の中には利の爲に國家
を忘るゝといふ様な者が出來ぬとも保障はされぬ、どうかすると國家のバチ
ルスとも稱すべき賣國奴なども出て來て我が國家の大生命に向つて危害を
興える様なことがある。蟻螂が斧を拒むやうなものではあるが、しかし中々油
断はならぬです。尤も日清日露の戦役時代よりして、國家的觀念は非常に發達
はして來たが併し此際は一層油断なく、益々此觀念の充實を圖るの必要があ
らうと思ふ。國家の爲めには身命をも顧みぬといふが大和心の精華があるが、
平常無事の日にも常にその精神を以て國家に盡すやうにせねばならぬ。商工
農業ともに國家の爲め社會の爲め人世の爲めといふ道德的觀念を奮起する
は、人道の歸趨、佛法の妙用である。故に此五位の上では功と云ふ外に共功とい
ふ位が必要になる。其は同なり與なりと注して衆生と其の功を與にするの義
であります。自分一人丈が佛の道を證して、大解脱を得ると雖も、是れ唯だ一部

の成功と謂ふべきである。自分だけが如何程立派な人物に成つたとて我が佛
教に於て決して充分の成功とは許さぬ。自覺のみありて覺他を缺くは車の半
輪あるが如くじや、例へば花瓶と云ふ物は何の爲めに必要かと云ふに是れは
水を容れる器であるから、水さへ容れば宜いと云ふて此口を閉じ蓋を爲した
のみでは中に清水が一抔入れてあるといふだけで、何等の役にも立たないので
ある。一たび水を容れたのは第一段の成功である。その成功した花瓶の口を開
いて自由自在に水を出して使ふて實用に供するので第二段の成功じや、是に
於て始めて水瓶の作用即ち徳が現はれるのである。吾々も亦た斯くの如く縦
ひ釋尊の如き完全なる大聖の位に上るとも、擅特山の山中に在つて、自調解脱
を獲得して、獨り自ら其法味を樂まると云ふ事のみであつたならば、吾々は
千萬歳の後までも手を合はして信心供養し奉る心も恩徳報謝の觀念も起ら
ないのである。釋尊が六年の間艱難辛苦を遊ばされたのは、ツマ、一切衆生を濟
度利益せらるゝが最終の御目的である。それであるから佛が

今此の三界は皆是れ吾が有なり、其の中の衆生は皆是れ吾が子なり

と仰せられて此の三千大千世界の全部我が教化すべき領地である、其の中の衆生は人類は云ふに及ばず其他の生物一切は皆是れ吾子である、といひなされたのじや、實に廣大無邊なる御慈悲心である、吾々も釋尊の如き廣大なる正法眼を開いて世界の状況を觀察する時は、一切の男子は我が父なり、一切は女人は我が母なり、吾より幼き者に對しては、吾子と思ひ、吾弟と思ひ、妹と思ひ、吾より長せる人に對しては、吾父母とも兄とも姉とも思ひ、五千萬の同胞は眞實の兄弟、世界の人類は眞實の友人と思ひ、常に博愛衆に及ばし、公益を進め世務を開くといふ御勅語を立派に實行して行くで無ければ眞の成功とはいはれぬのです、自分の修養が出来たならば、他の多くの人を啓發誘導して相共に智徳圓滿の境界に達せしめんとする慈悲的活動を無礙自在に現はさしむるのが共功の位である、そこで此の共功の位に進むには誓願といふ事が最も必要である、其の誓願は無數にある中に一切の佛や菩提に通ずる誓願が四通りあ

る、即ち

- (一) 衆生無邊誓願度
- (二) 煩惱無盡誓願斷
- (三) 法門無量誓願學
- (四) 佛道無上誓願成

である、一切の衆生は無邊なるも、誓て濟度しやう、諸の煩惱は盡くること無きも、誓て截斷しやう、諸佛の法門は限り無きも、誓て學び盡くさん、佛の道は無上なるも、誓て之を成就せんとの大誓願を確立し、自覺と覺他と併へ行ふて、益々世界の爲め人生の爲めに不惜身命の行持を勵むのを佛敎に於ては菩提行と云ひます、菩提といへば到底吾々の及ばざる位地の様に思ふ人もあるが、菩薩とは佛弟子の異名です、此方の語に譯すれば覺有情なぞいふ譯語もあるが、解り易く云へば大心の人といふ意になる、或は大士とも云ふ、即ち大きな心の人と云ふ事である、大きな心とは寛大なる度量と遠大なる慈悲心とを以て人生を救濟し、社會を化度するの謂である、故に自分一人の解脱を圖ると云ふ様な狭い心に任せず、我が生命のあらん限り、我が精力のあらん限りは、分に應じ機

に従つて社會の爲めに盡くし、國家の爲めに盡くして行くと云ふ廣大無邊なる心で未來際を期して化導濟度に從ふ人が菩薩である。譬へて見ると座敷を掃除するの如き室内が穢いから奇麗にせねばならぬと決心するのが向の位で、斯く決心したならば箒を持って來る、雑巾を持って來る、自分が斯んな姿じや掃除が出来ぬと思ふたら、タスキも掛ける、手布も締める、裳もかゝげる、裾も端折り、隅から隅まで忠實に掃除をするのが奉の位です、いよいよ坐敷が奇麗になつたのが第三の功の位である、併し座敷は奇麗にしたが人を入れちやならん自分獨りで寢て居るのじやといふのみではそれじや何にもならん、唯だ奇麗になつたといふだけだ、既に奇麗になつたなら自分が未だタスキを取りはづさないうちにも早や人を其處へ入れて饗應もし接待もする之が共功の位になる、昔し支那の老子の師匠に常從といふ先生があつた、此の常從が年老いて將に死なんとする時、老子が傍に在りて教を乞ふた、先生はマウお隠れになるであります、うが、どうか吾々門下生に對して最後の教訓を願ひたいと、常從は

大きく口を開いて我が口中に齒があるかと問はれた、常從の口中を見ると齒は上下共に一本もない、(尤で齒無しじや)齒はござりません、然らば舌は有るか、舌はござります、其時常從は徐ろに教へを垂れて、汝等も亦能く齒と舌との關係を思ふて見よ、齒は堅きが故に早く落ちる、舌は柔かなるを以て永く存す、處生修道の秘訣は必すしも之を遠きに求むべからず、お互の口中に在る齒と舌が能く宇宙の眞理を説明して居る、之を標準とせば以て人智の妙を盡くし處生の秘訣を窺ふ事が出来るであらうと云はれた、齒といふものは頑固なるが故に永續に堪へぬ、舌は柔順なるが故に却て堅いものよりも堅き力がある、さうして舌は亦た吾々の爲めには頗る善良なる教訓を興へて呉れる、第一に舌は極めて寛大の度量を有して居る、如何なる物が來るも忌み嫌ふことなく、朝から晩迄舌に接する物は多種多様である、甘き物もあり、辛き物もあり、冷き物、熱き物、生な物、煮た物、其他色々な物に接して能く之を取め更に撰り嫌ひをせぬ、是れ則ち共功の徳である、然して口中へ御飯が通入れば其御飯が舌の上に

未だ滞在して居る中に、後から御汗や漬物杯が這入つて来る、何んでも受込む、舌は全くの佛様です、而して何物が這入て来ても唾液でもつて能く之を調和して味を製する、偶々結構な御馳走にでもなりて特殊な物が入る来るとも盡く調和して其調和した物は少しく己れ自ら貯ふることなく、皆な之を奥座敷の腹の中へ送てしまふ、丸で賽の河原の石を積む様なもので、溜ると送り溜ると送りして居る、サテ其奥座敷とは何にを云ふか、即ち天下國家父母祖先社會等である、自分の修養が既に立派に、處世の秘訣を得、世に處して世に着せず、美しい誓願力を以て總ての物を自己の願海の中に同化せしむるの大度量を有し、愈々自利自調の徳が成功した結果は己れ自ら其成功に満足せず、皆な盡く之れを國家の爲め、社界の爲め、父母祖先の爲めに回らしてゆく、即ち奥座敷へ送るのである、之れを佛敎で回向と云ふ、自分の得た智識は皆社會國家に向ける、自分の得た道徳は即ち父母祖先に向ける、己れの功を回らして一切衆生に向けるのが回向である、其の回向的標準は簡單なる三寸の舌一枚の上にもキ

チンと具はつて居る、故に常従は此舌一枚の上に處世の秘訣人道の妙味は盡く説明されて居るといふ最も適切なる教訓を與へられたのです、されば五位の中の第四位に共功と云ふ事を置かれたのである、併し其功を執して之れを誇るの念があつてはならん、座敷を掃除しましたならば、サアお這入りなさいといふても、若し己れが掃除して奇麗になつたんだから之を有り難やと思ふて下さいと云ふたなら、其一言で今迄の功が皆な俗化してしまいます、所謂「住相の布施は生天の福」といふのは、コ、じや、故に五位の最後に功々といふ一位があります。

第五、功功の位、乃ち功を成すも其功に滞らさ、其の上に一段の功を積む、マウ出来上つたと云ふて安心するのは第一期の功で、其上更に一步を進め、功動邊にも居らぬと云ふが功功です、即ち第二期の功である、之を解り易く云へば無功の功である、どんな立派な人物になつても己れは豪い人物じやと自惚れては、決して立派な人物たることを得ぬ、幕末の大儒安積良齋先生は、極めて容貌の

醜い人であつたと云ふ事です、また青年の時代に嫁さんを娶つた嫁さんも縁付て来ては見た者の如何にも先生が餘りに醜いので丸で化物と同居して居る様な氣かして氣味が悪くてならん、とう／＼我慢が出来なかつた者と見へ實家へ逃げ歸つたさう云ふ時に若し愚癡の深い者であつたなら、必ず其嫁を恨むとか或は精神に狂ひが出るであらうが、先生はさうでない、自分は當り前の手續を以て嫁を貰ひしに、其嫁にさへも嫌はれる程の醜男子であるから殆んど體形上では一人前の資格はない、併し人間と云ふ者は容貌計りで世に立つべき者でない、精神、智能及び道徳が大事である、これからは大に奮發して、心を以て世に立たうと云ふ決心を起して郷里を離れ、諸方の學者の門を叩いて非常に勉強し、とう／＼立派な大學者となつた功成り名遂げて後、床の間に一人の美婦人の畫像を飾つて毎朝御馳走を備へて少しも怠らぬ、或人之を怪みて先生の様な眞面目な御方があゝ云ふ婦人の繪を掛けてお出でになるのは如何云ふ譯かと尋ねると、是は予が青年時代に貰つた花嫁であるが、予の醜

を嫌ふて里方に歸つた予を嫌ふは人情の自然にして、決して無理はない、予は鏡に向て自ら見るに、嫁に嫌はれるだけの立派な資格を有つて居る、嫁が嫌つて呉れたればこそ予をして今日あるに至らしめた予が聖人の道を學ぶやうになつたのは全く此の花嫁のお蔭である、故に予は此花嫁に向つて感謝して居るのであると云はれた、普通であつたなら生涯忘れぬ程の憎しみを持つてあらうが先生は憎い者を憎いとも思はず、自分が立身したのは此の婦人の賜物として居られたのです、是れ初めを忘れず唯だ己れの性を盡し道を習ふを本分として居られたのです、總て世の中は、上に立つ人や富める人のみを以て快樂を得ることは出来ぬものです、車賃を澤山持て居ても車を挽いて呉れる者が無ければ自分でタク／＼歩くより外は無い、雇人や下女奉公をする者が無ければ、檀那さんが一人で雑巾がけまでせにやならん、奉公する者があればこそ御飯も炊いて呉れる、店の仕事もして呉れる、御給仕もして呉れる、其方面から見ると下女下男も皆な我が恩人である、況んや安積良齋先生の如き觀

念を有つて居るならば、自分を嫌ひ厭ふた者迄も、自分の身に對する刺激劑なりと思ふてそれが修養を増進するの縁となる、それであるに少し出世でもしたり功勳でも現はしますると直ぐ自分は豪い者と思ふて自ら誇り、自ら昂ぶりて目下の者を輕蔑するやうになる、吾は成功したからと云ふて、高く止つて高慢我慢に陥ると云ふ様な事では未だ自分の功績の至らざるを證明する様なものである、慈善道德の上でも其通りである、善を行ふて善を忘れ、惡を止めて惡を忘るといふて、其徳行が自然に合ふ時は、更に功の跡を留めぬ、御前は親孝行であるといはれたも、どう致しまして親孝行どころじやございませんといふ程の人ならば益孝道を全ふし、而して道を行ふ事に於て足ることを知らぬやうになる、ソコで益其の徳が圓滿になる、是れが即ち無功の功である、曹洞宗の御開山承陽大師が支那の天童山に在りて御修行の際、丁度八月の極々熱い時分、佛殿の前を御通過になると、大府の用典座と稱する典座職を勤めて居らるゝ六十餘歳計りの老僧が、熱い處に笠も被らず熱心に獨りでキノコを

隠して居られた、承陽大師は之を見て非常に氣の毒なと思召した、尤も其時分は承陽大師が未だ二十七八歳の頃です、ソコで其老僧の傍によりて丁寧に禮を爲し、尊公の寮内には行者とか童子とかいふ多くの召し使がある、又次役の人も居られば、青年の僧侶も澤山居らるゝ筈じや、故に御自身で此様な骨折りの仕事をなさらんでも、オクラも人を使つて爲さしめたら宜いでは無いかと云はれると、彼の老僧は「他は是れ吾にあらす」と曰はれた、即ち他人に仕事をさしては自分の勤にはなりません、幸に佛の弟子と成りて法衣を着くる身の上、特に典座の大任に當れる上は、どれ程人が傍に居やうとも、自分の精力のあらん限々は事に當りて盡さねばならん、先年亡くなられた谷干城子の夫人がさう云はれた事がある、自分は毎朝女中を起すに、病氣の時は別段じやが平生は必ず自分が先きに起きて、而して後に下女等を起しますと申されたが、實に名言です、又修養の筈でも、自分が寝て居つて召使の者を起しても、仲々起るものではない、先づ自分の身を以て模範を示すのが即ち身體の教育と云

ふものです。そこで用典座も、「他は是れ吾にあらず」と云はれたのである。大師は大に感心なされたが併しこのやうな暑い日中に致されんでもモット涼しい日に於てするとか、又は日蔭の移つた後になされても宜しいではありませぬかと仰せられましたれば彼老僧は更に「何れの時をか待たん」と答へた。實に今日は熱いから明日にしやう、今は寒いから後刻にしやうと云て居たならば、六十歳の歳月を送過せし身、殊に今晚の命も保ち難い無常の世にありてどうして佛法の行持が勤まることが出来やうかといふの意味です。承陽大師は此一言をお聞きなされて總身に寒毛卓立する程感激の情が溢れたぞと仰せられてあります。眞實の佛法の行持は斯うなければならぬ所がお互に少々仕事でもすると、己は斯んなに働いたのに手傳へも仕ないとか、汝等の怠りより此年老いた己れ迄が仕事をせねばならぬとか、なんとかかと云ふて高慢やら不平やらを述べ立つるから折角仕事をした功德は皆な流してしまふのである。依て常に自利利他の修養をはげみながら、少しも其の功に誇るの心ないのが功

功である。適切に云ふたならば如何程の大功を奏するも毫も大功と思はず、マウ一段と進み行き、未だ己れが行ひは足らぬと云ふ考へを有つて居るこそ、眞實の大功を奏することが出来るのである。諸君も願はくば斯くの如き心得を以て修養を積み自分の精神を勵まして以て社會の改善を扶け、風俗の矯正を圖り、又は教育の普及と發達とに努められたならば、一步一步に眞箇の功績が現はれてくるのであらうと思ひます。斯くしてこそ所謂「行も禪座も禪語默動靜體安禪」と云ふ禪の活機用が現はれ、日用光中の七顛八倒も皆な座禪三昧の妙用となります。前にも申した通り、禪は禪宗の禪にあらずして佛教の禪であるから、天台眞言の上にも念佛の上にも題目の中にも皆な禪はある。加之ならず、大智禪師は「雨竹松風皆説禪」と曰はれた如く、宇宙萬象も皆な禪ならざるは無いのですから、能く天地の眞理を悟り、其の理を實際に行ふ様に身心を修養なさるのが吾々人間の本務であります。是れ則ち禪的修養の根本義ですから、其の標準に依つて自己を修養し、進んで國家社會の爲め充分に盡くしな

さらんことを希望いたします。此に宜あつて言足らず未だ充分に説き盡くさ
 ない點は澤山ありますけれども禪と云ふ事に就ての大體を述べた次第であ
 ります。

禪學入門 終

明治四拾四年拾一月八日印刷
 明治四拾四年拾一月一日發行

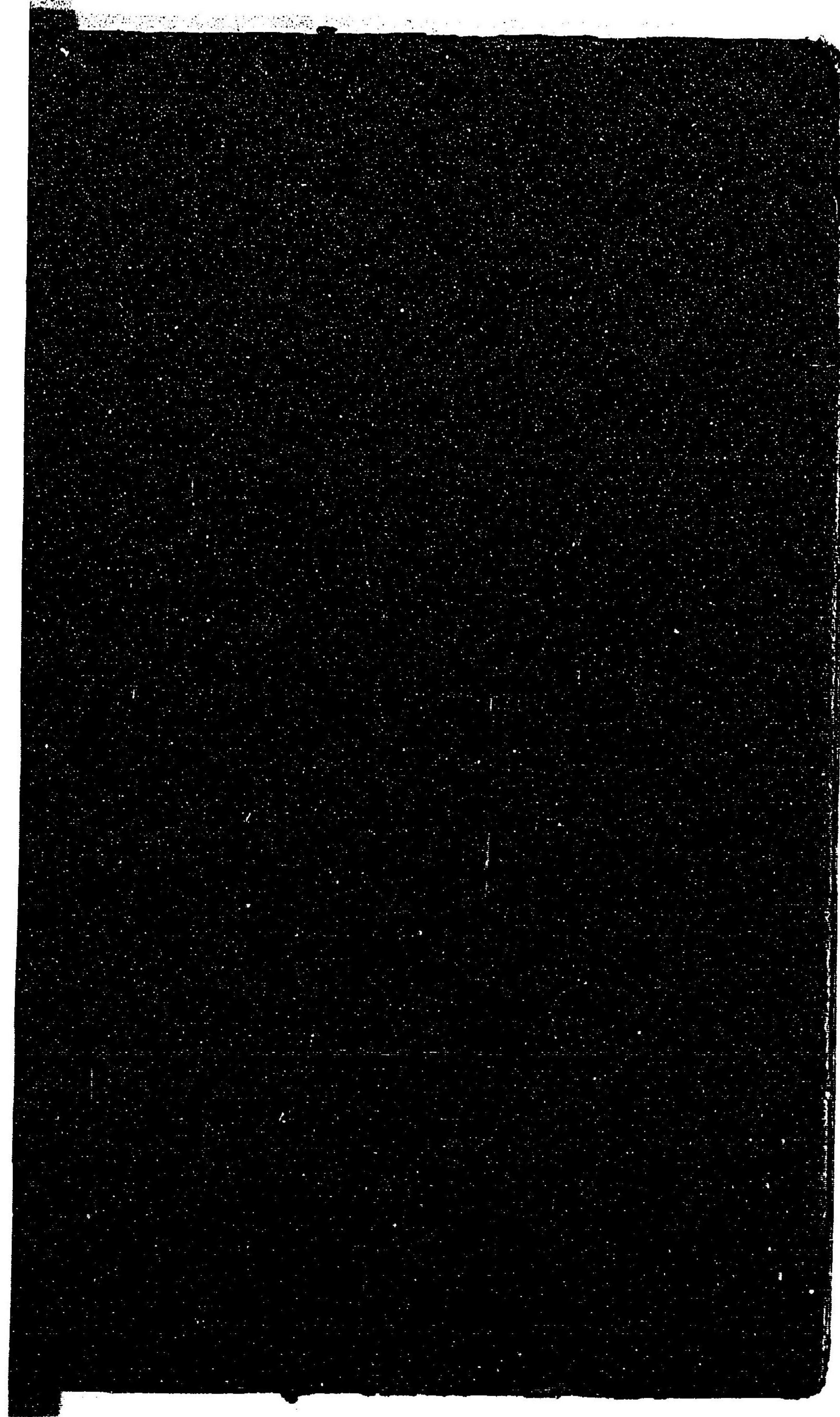
複製 不許

定價金七拾錢

發行所 東京市本郷區 豊文館
 東京市神田區 武藏屋書店
 東京市本郷區 豊文館
 東京市神田區 武藏屋書店

地方特約大所賣
 大阪府東區北久寶寺町 富文堂
 福岡縣久留米市米屋町 貴星堂
 京都府下京區烏丸佛光寺 文律堂
 名古屋市西區玉屋町 書書書
 札幌區南一條三丁目 書書書
 書店書店書店

324
270



019605-000-9

324-270

禅学入门

新井 石禅/著

. M44. 11

ABG-0385



